

研究・調査報告書

| 報告書番号 | 担当 |
|---|-------------------|
| 3 | 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学 |
| 題名（原題／訳） | |
| Prevention of Alcohol Dependence : Strategies for Selective, Indicated, and Universal Prevention. アルコール依存の予防：選択的、適応のある統一的な予防のための戦略 | |
| 執筆者 | |
| Manjunatha N, Saddichha S, Khess CR, Murthy P, Isaac MK. | |
| 掲載誌（番号又は発行年月日） | |
| Subst Abus. 2011 Jul;32(3):135-43. | |
| キーワード | |
| アルコール依存 予防 戦略 | |
| 要 旨 | |
| <p>目的： アルコール依存症の依存症診断基準の時間軸研究は、一次予防（選択的、必要性、統一的な予防）に配慮した、アルコール依存症の発症の減少のためのアルコール依存症の予防戦略のデザインを可能にする。この研究の目的は、ICD-10 に基づいた診断を受けた患者における年齢別、順番、時間軸の研究をするものである。</p> <p>方法： ICD-10 に基づいたアルコール依存症の診断を受け、継続的に入院、同意を得た患者に依存症治療終了後に SSAGA-II を使用した構造的面接によって評価した。対象者は 81 名であった。</p> <p>結果： アルコールを最初に飲み始めた年齢は 18.72 歳 (SD:6.84)、第一基準に達した年齢は 24.33 歳 (SD:9.21)、ICD-10 で依存症と診断されたのが 27.51 歳 (SD:9.28) であった。年齢別の年代別配列において、我々の研究対象者では、酒に対する耐性が 97.53%、飲酒のコントロールが出来ないものが 80.24%、酒に対する渴望が 79.1% にみられた。順番的時代学は、第一基準として渴望が (16%) が、あるいは耐性 (71.6%) が見られ、渴望 (16%)、耐性 (21%) あるいは飲酒のコントロールが出来ない (18.5%) ものが第一基準の 55.5% の対象者に観察された。</p> <p>結論： 適応となるべき予防方法は、酒に対する耐性と渴望、飲酒のコントロールが出来ないこと、抗欲求の治療や行動療法について問診することでなされるかもしれない。個別の予防は、遺伝学的に前述の傾向のある人にはナルトレキソン剤（わが国では未承認）の使用、さらに、一般の予防は、アルコール飲料に医学的な注意喚起のラベルを貼付することと考える。</p> | |